

もうひとつのwonder



Charlotte

シャーロット

通学路でのこと

目の不自由なおじいさんが、メイン通りでアコーディオンを弾いているのを、毎日学校へ行くときに見ていた。ムーア街との角にあるスーパーマーケットのひさしの下でスツールにすわり、その前では盲導犬が毛布の上に寝そべっていた。犬は首に赤いバンダナを巻いていた。黒いラブラドル犬。どうして知っているかというところ、ベアトリクスお姉ちゃんが聞いたことがあるから。

「すみません、おじいさん。その犬はなんとという種類ですか？」

「ジヨニは黒ラブ。ラブラドルだよ、お嬢ちゃん」

「とっってもかわいい。なでもいいですか？」

「いや、なでないほうがいい。この犬は仕事だからね」

「わかりました。どうも。じゃあまた」

「さようなら、お嬢ちゃん」

お姉ちゃんはおじいさんに手をふった。だけど、もちろんわかりっこないから、おじいさんは手もふり返さなかった。

ベアトリクスお姉ちゃんが八歳のときのこと。わたしがピーチャー学園の幼稚部に通いだした年だ。

それでも、毎年
春がくるたびに世界は若返り、
妖精たちは歌う。
——『花の妖精たち 春』より

だれも、シンガリンを踊れない
わたしのようには。
——アイズレー・ブラザーズ『ノーバディ・バット・ミー』より

わたしが自分でアコーディオンのおじいさんに話しかけたことは一度もなかった。あんまり言いたくないけれど、そのころ、なんだかおじいさんがこわかった。おじいさんの両目はいつも開きっぱなしで、どんよりくもった感じ。クリームがかっていて、白と薄茶色のビー玉みたい。不気味だった。おじいさんの犬もこわかった。いつもなら大の犬好きなのに、わけわかんないよね。だいたい、自分でも犬を飼っているのに。なのに、灰色の口輪をはめて、目ヤニがついている、あの犬はこわかった。だけど、おじいさんも犬もすごくこわかったのに、おじいさんの前に置いて置いてあるアコーディオン・ケースに、わたしはいつだって一ドル札を入れてあげた。不思議なことに、アコーディオンを弾いている最中でも、わたしがうんと静かに忍び足で近づいても、おじいさんは一ドル札がばらっとケースに落ちる音を聞きつけていた。

「アメリカに神のお恵みを」おじいさんは、決まってわたしのほうへうなずきながら、そう言った。いつも不思議でたまらなかった。どうして聞こえたんだろう？ どうしてうなずく方向がわかったんだろう？

ママが、目の不自由な人は失った感覚をおぎなうためにほかの感覚が発達するのだと教えてくれた。つまり、おじいさんは目が見えないから、人並みはずれた聴覚を持っているってわけ。

そう聞いたらなんとなく、おじいさんにはほかにも超人級の能力があるように思えてきた。たとえ

ば、冬の凍りつくような寒い日に、アコーディオンの鍵盤をたたく指をあたたためておく魔法のような力があるのかも？ 指だけじゃなくて体をあたたためる方法も……。そういうひどく寒い日、わたしなんか、凍えるような風にむかって数百メートル歩いただけでも、歯がガチガチ鳴りだしてしまう。なのに、どうしておじいさんは、アコーディオンを弾いていられるの？ おじいさんの口ひげやあごひげが、あちこち凍りついていることもあるし、犬の上に毛布がかかっているか、手をのばして、たしかめていることもある。だから、ぜったい寒さを感じているはずなのだけど、なぜ弾き続けられるんだろう？ あれはどう考えても、人並みはずれてる！

冬のあいだいつもわたしは、一ドルでなく二ドルをおじいさんのケースに入れさせてほしいと、ママに頼んだ。

ばらっ ばらっ

「アメリカに神のお恵みを」。

おじいさんは、年中、八曲から十曲くらいと同じ曲を弾き続けていた。クリスマスのところだけは、『赤鼻のトナカイ』や『天には栄え』を弾いた。ほかのときは、ずっと同じ曲ばかり。いくつかママがタイトルを知っている曲もあった。『デライラ』、『ララのテーマ』、『悲しき天使』。ママがタイトルを言えた曲を全部ダウンロードしてみたら、ママが言ったとおり、おじいさんが弾いている曲だった。

でも、どうして同じ曲ばかりなの？ これしか弾けないの？ これしか覚えていないの？ それとも、ほかにたくさん弾けるのに、これだけ選んで弾いているの？

考えれば考えるほど、疑問がわいてきた。いつアコーディオンを弾けるようになったんだろう？ 子どものころ？ そのころは目が見えていた？ もし見えていなかったとしたら、どうやって楽譜を読んだの？ どこで育ったの？ メイン通りとムーア街の角にいないときは、どこで暮らしているの？ おじいさんが右手で犬のハーネスをつかみ、左手でアコーディオンを抱えながら、犬といっしょに歩いているのをたまに見かけた。すぐくゆつくり！ あれじゃ、たいして遠くまで行けそうもない。なら、いったい、どこへ行くの？

おじいさんに聞きたいことは山ほどあったのに、こわくて一度も聞けなかった。ただ一ドル札をあげただけ。

ばらっ

「アメリカに神のお恵みを」。

いつも同じ。

何年かして、それまでより少し大きくなったら、おじいさんをこわく感じなくなったけど、そのときにはもう、あんなに疑問に思っていたことも気にならなくなっていた。おじいさんの姿を見慣れた

んだらうね。くもった目のことも、人並みはずれた能力があるのかどうかも、かまわなくなっていた。だからといって、おじいさんの前を通るときに、お金をあげなくなったわけじゃない。なんだかそれはもう、習慣みたいになっていた。地下鉄の自動改札機にメトロカードをタッチするみたいな感じ。

ばらっ

「アメリカに神のお恵みを」。

そして五年生になったら、ぜんぜんおじいさんに会わなくなった。学校へ行くとき、おじいさんの前を通らなくなったからだ。ビーチャー学園の中等部は、初等部よりも数百メートルうちに近い。登校するときにはベアトリクスお姉ちゃんと一番上のエイミーお姉ちゃんがいっしょで、帰りは親友のエリー、それから近所に住むマヤやリナと歩くようになった。学年がはじめたころは、スーパーマーケットに寄り道しておやつを買って家へ帰ることもあった。そのときアコーディオンのおじいさんを見かけると、一ドル札をあげて、「アメリカに神のお恵みを」って、おじいさんが言うのを聞いた。だけど、だんだん寒くなるにつれて、道草もあまりしなくなってしまった。そんなわけで、冬休みに入って数日たった日の午後、ママといっしょにスーパーマーケットへ行っってはじめて、アコーディオンのおじいさんがいなくなっていたことに気がついた。

おじいさんは消えてしまった。

冬休みのこと

わたしを知る人たちは、わたしのことを大げさすぎる子だって、いつも言う。なんでそう言われるのか、ぜんぜんわからない。だって、わたしは、ホントにホントに大げさになってないんだもの。だけど、アコーデオンのおじいさんがいなくなったことを知ったら、どうしても気になってしかたがなくなった。理由は不明。おじいさんになにがあったのか気になって、頭から離れない。なにがなんでも解決しなきゃいけないミステリーって感じ。いったいぜんたい、メイン通りでアコーデオンを弾いていた目の見えないおじいさんに、なにが起きたの？

だれも知らないみたいだった。ママといっしょに、スーパールのレジ係や、クリーニング店の女の人や、通りのむかいのメガネ店の男の人に、おじいさんがどうしたのか知らないか、たずねてみた。このあたりで駐車違反の取り締まりをしている警官にも聞いてみた。みんなおじいさんを知っていたけれど、どうしているのかまでは知らなかった。ただ、ある日ふっと消えて、いなくなってしまったんだ。その警官が言うには、すごく寒い日になると、ホームレスの人たちは凍え死なないように市のシエルターに連れていかれるそうさ。だから、もしかしたら、アコーデオンのおじいさんもそうなんじゃないかって。だけどクリーニング店の女の人は、おじいさんはぜったいホームレスじゃないと言

っていた。朝早くに三番のバスから降りてくるのを見たことがあるから、ニューヨーク郊外のリバーデイルかどこかに住んでいるのだろうと思ったそうさ。そして、メガネ店の男の人、おじいさんは有名なジャズ・ミュージシャンだった人だからお金持ちのはずで、まったく心配することはない、と言っていた。

こんなことを聞いたなら、わたしが少しはほっとしただろうと思うよね？　ところが、ぜんぜん！　かえっておじいさんに興味を持ってしまい、どんどん疑問がわいてきた。冬のあいだはホームレスのシエルターに行ったの？　それとも、リバーデイルのりっぱな家に住んでいるの？　ほんとうに有名なジャズ・ミュージシャンだったの？　お金持ちなの？　もしお金持ちなら、なぜアコーデオンを弾いてお金をもらっていたの？

そのころにはもう、うちの家族はみんな、わたしがおじいさんの話ばかりするのにうんざりしていた。

ベアトリクスお姉ちゃんに言われちゃったよ。「シャーロット、またその話したら、全身ゲロだらけにしちゃうからね！」

エイミーお姉ちゃんも言った。「シャーロット、もういいかげんにして」

ママは、わたしのそんな熱心さを、なんとかよい方向にむけようと、不要になったコートをご近所

さんから集めてホームレスの人のために寄付をする慈善活動をしたらどうかと提案してくれた。そして、いっしょにチラシを作り、まだ着られそうなのにならなくなった冬物のコートがあったら、ビニール袋に入れてうちの前の寄付箱に入れてくださいと呼びかけた。大きなゴミ袋が十袋もいっぱいになるほどコートが集まり、ママとパパとわたしは、ダウンタウンにある慈善団体パワリー・ミッションへ車で運んで寄付してきた。あんなにたくさんのコートを、必要としている人たちにあげられて、ほんとうにうれしかったよ！ 両親といっしょに慈善団体の建物のなかに入ったとき、アコーディオンのおじいさんがいないかどうかキョロキョロ捜したんだけど、いなかった。でも、どっちにしろ、あのおじいさんはずっと前からいい上着を着ていた。あざやかなオレンジ色の、カナダグースっていうブランドの防寒着。ママは、おじいさんが噂どおりのお金持ちなのかも思っていた。

「カナダグースの防寒着を着てるホームレスなんて、そうそう見ないわよ」というのが、ママの意見。冬休みが終わって学校に行ったら、中等部の校長のトウシユマン先生が、コートの慈善活動をはじめたことをほめてくれた。いったいどうやって知ったんだろう？ トウシユマン先生は偵察用の無人航空機をこっそり飛ばして、ピーチャー学園のみんなを見張っているんだらうって、よく言われている。でなきゃ、あんなにいろいろ知っているわけがない。

「冬休みを利用して、すばらしいことをしたね、シャーロット」

「え、ええ、ありがとうございます、トウシユマン先生！」

先生はいつも、ほんとうにやさしい。わたしはトウシユマン先生が大好き。特に好きなのは、わたしたちをけっして小さい子扱いしないところだ。わたしたちがちゃんと知っていて理解できるはずだと信じて、むずかしい言葉をそのまま使うし、わたしたちが先生に話しているときはぜったい視線をそらさない。それに、サスペンダーや蝶ネクタイをつけ、真っ赤なスニーカーをはいているのも大好き。「ピーチャー学園でもコートの寄付活動をはじめたいんだが、手伝ってもらえるかな？ きみはすでにいろいろよく知っているだらうから、ぜひ意見を出してほしい」

「もちろんです！」

こうしてわたしは、その後、毎年行われることになるピーチャー学園コート寄付活動の第一回目に参加することになった。

とにかく、冬休みが終わって学校がはじまったとき、コート寄付活動だのほかの騒ぎだのいろいろあって（くわしくはこのあと説明するからね！）、メイン通りでアコーディオンを弾いていた盲目のおじいさんの謎を解くどころではなくなってしまった。数か月前だったら、こういう謎はエリーがいっしょに考えてくれたんだらうけど、今はもうまったく興味がないみたい。そしてマヤもリナも、おじいさんのことなんか、ちっとも覚えていないようだった。じつのところ、おじいさんにながあっ

たのか、だれもぜんぜん気にしていないから、とうとう、わたしもこの話をそのままにしまった。それでも、アコーディオンのおじいさんのことを考えることが、今もときどきある。たまに、おじいさんがアコーディオンで弾いていた曲を、ふと思い出す。そして、そのメロディーを一日中ハミングしていたりする。

男子の戦争がはじまる

冬休みがあけて学校にもどったら、だれもかれもが「戦争」——別名「男子の戦争」のことばかり話していた。そもそものはじまりは冬休み直前に起きた。休みに入る二、三日前、ジャック・ウイールがジュリアン・オールバンズをなぐって停学処分しじふんになった。もう、大騒ぎおおさわぎだった！ 学校中この話でもちきり。でも、どうしてジャックがそんなことをしたのか、だれも知らなかった。ほとんどの子はオーガストが関係しているんだろうと思った。オーガストっていうのは、うちの学校の生徒で、生まれつき顔に重度の問題がある。重度も重度、すごく深刻しんこくなんだ。目も鼻も口も、顔にあるもの全部、あるべきところについていない。はじめて見た人は、かなりショックを受ける。マスクでもかぶっているように見えるから。それで、オギーがビーチャー学園に入学したとき、学校みんながじろじろ見た。オギーはどうしたって、めだっちゃう。

何人か、つまりジャックやサマーやわたしなんかは、最初からオギーにやさしくしていた。たとえばわたしは、廊下ろうかですれちがうと「おはよう、オギー。元気？」とか、いつも声をかける。そりゃもちろん、学校がはじまる前にトウシユマン先生から、オギーの案内役になってほしいと頼たのまれたせいもあった。でも、もし先生に頼まれていなかったとしても、やっぱりやさしくしていたはず。

だけど、ほとんどの子は——もちろんジュリアンやジュリアンの仲間たちも——オギーにまったくやさしくしなかった。特に最初のころはひどかった。みんな、必ずしも意地悪しようとしたわけじゃないと思う。オギーの顔をちよつと気味悪がった、ただそれだけじゃないかな。オギーがいなくて、ずいぶんバカにして、オギーのことを奇形きけいと呼よんでいた。ペスト菌きんという、さわったらすぐに手を洗わわないといけないっていうゲームまでやっていた。もちろん、わたしはやらなかったよ（といても、わたしもオギーにさわったことは一度もない。でも、それはさわる理由がなかっただけ）。だれも、オギーとおしゃべりしたり、授業じゅぎょうの課題にペアで取り組む相手になったりしたがらなかった。少なくとも、学年のはじめのころはそうだった。二、三か月すると、みんなだんだんオギーに慣なれてきた。べつに特別やさしくなったわけじゃないけれど、意地悪なんかはしなくなった。だけど、ジュリアンだけは例外！ ジュリアンはオギーのことで、あれこれ騒さわぎ続けていた。まるで、オギーの外見は現実げんじつだと、いつまでも信じられないみたい。オギーにはどうすることもできないっていうのに。

とにかく、きつとジュリアンがジャックに、オギーについてなにかひどいことを言ったにちがいないって、みんな思った。そして、ジャックはいい友だちだから、ジュリアンをなぐったんだらうって。うわあ！

それで、ジャックが停学処分しよぶんを受けた。うわあ！

やがて、学校にもどってきた。うわあ！

これはもう大騒ぎおおさわぎ！

けど、これで終わりじゃなかった！

だって、聞いてよ。ジュリアンときたら、冬休み中に大きなパーティーをやって、ジャックを仲間はずれにするように五年生全員を言いくるめちゃったんだ。そして、ジャックが情緒不安定じょうちゆうふあんていだとジュリアンのお母さんが学校のカウンセラーから聞いたという、おかしな噂うわさをばらまいた。ジャックはオギーの友だちでいるプレッシャーに耐えかねてキレてしまい、暴力行為ぼうりくゐに出たんだらうっていうの。とんでもない！ もちろん、どれもほんとうのことじゃない。ほとんどの子はわかっていたけれど、ジュリアンがうそを広めるのを止められなかった。

そして今、男子はみんな戦争中。こうやってはじまった。バカみたいよね！